川柳雜誌

第一卷第四號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
大正十三年五月十日印刷
（毎月一回十五日發行）
大正十三年五月十五日發行

川柳雜誌　第一卷　第四號（大正十三年五月十五日發行）

目次

時事吟に就て……麻生路郎…(二)
句になる迄……遲日莊主人…(九)
病牀にて……椙元紋太…(一四)
松ヶ岡の狂句……阪井久良岐…(一五)　難句に就ての論點……路郎・生…(一五)
川柳書架(一)……(二三)
私設無線放送……よの字…(二四)　同人一家の病覽……(二五)
近作柳樽……路郎選…(二六)
募集句
眼病……矢野きん坊選…(二六)
叔父……椙元紋太選…(二七)
禊……吉川啞人・竹田芦穫共選…(二〇)
東京にて……久流美…(二〇)　寄せ書から……(二〇)
第十一支部より……柳路…(二一)　各地柳況を募る……(二一)
川柳塔……(二四)
彩霞、徹底郎、花童子、莢豆、雅幽、芦穫、零骨、二柳子、一洲、柳路、一聲、輝翠、啞人
本社三月例會……(二〇)　第十二支部句會・花童子記(二一)　川柳稻荷會……(二六)
第五支部小集……飛水報(二七)　第十支部小集……(二八)　遲日莊偶會……(二八)
幼稚會……(二九)　編輯後記……(二六)
近作……麻生路郎…(五)

川柳雜誌

第一卷 第四號

柳の葉が青く長くのびてゆく。生々としてのびてゆく。私達の心もちを世の中へ傳へるかのやうに。（路）

時事吟に就て

▼これは舊稿です。大正日日（大正九年十月四日）の文藝欄に一度載せたことがあるのです。時事吟は雖句になり易いといふ例にあげておきます。しかし川柳の門外漢からは普通の川柳よりもこの方がよろこばれます。興味的に句が出來てゐるかちです。本誌の讀者には、あまり時事吟を作ることをおすゝめしませんが句作の練習には面白いかも知れません。時事吟は矢張り新聞のものです。（路郎生）

川柳時事吟は川柳として更に一城壁を設けられた觀がないでもない。時事吟は時の流れに依つて生命の稀薄を感ずることが深いので從來川柳を詠む人々からは殆んど研究もせられず時に新聞の片隅に夜光蟲の如き光を投げてゐたに過ぎない。それにしても餘り精選されたものが少いので一般川柳家は時事吟を喰はず嫌ひの畑に追ひ込んでしまつてゐた。

自分が前の大正日日で時事吟を募集してみた處が仲々面白いものが集まつて新聞柳壇として普通の川柳を壓倒してゐる觀があつた。これは全く新聞そのものゝ性質上時事吟の方が普通の川柳よりも適するといふことを語つてゐるものではあるまいか

川柳時事吟が世間の人達から共鳴され歡迎された事は時事吟が主として活社會の動的方面の事象を描寫するにある。萬人の以て言はんとして言ひ得ざる處のものを易々としてつかんで見せる手腕に依るのである。川柳時事吟の採るべき材料は到る處に轉がつてゐる。多少の研究によつて之を捕捉することは敢て難事ではない。

これは春末だ寒い時分のことである。心齋橋筋の大丸呉服店が祝融氏の爲に烏有に歸した事があるが、その時分の時事吟に

大丸が燒けて十合の火の廻り

といふ句を發表した處が大丸の人達も十合の人達も一讀苦笑されたざうである。曾し三越が燒け、高島屋が燒け、大丸が燒けた時に、何人の心も次は十合の番だといふことを物好奇でなく

さも想像するのが人間の常である。

この句の面白いところは何人も言はんとして言ひ得ざる處のものを僅々十七文字に收め得た巧妙さにあるのである。

自分が先日所用で十合の横を通つた時に偶と請願消防の設備がしてあるのに氣づき、今度は十合の番だといふ群衆心理の歸趨する處を必ず言ひ當るものであるが、十合の今日安全であるのは全くこの用意あるがであると思つたと同時にこの用意あらしめた一句。『大丸が燒けて十合の火の廻り』が想起して心中少からず快味を感じたのである。時事吟必ずしも漫罵するものではない。之が讀み方の如何に依つては處世上に一大警告を與へられるものである。

時事吟の多くは、その生命が刹那的であり花火線香的である捕捉し來つた題材が白熱化してゐる時に尤もその句の價値ある時であつて如何に大問題であらうとも一度その内容の事象が世間の耳目から遠ざけられた時には句としての存在はあり得ることもその生命に於ては全く稀薄なものとなつてしまふ。俳諧柳樽中に多くの難句を發見するは全くこれが爲である。それ等の難句の多くはその時代に於ける時事吟であつて當時は尤も川柳として高い匂ひのしたものに違ひないけれども時代の霧は之を遠くさへぎつて今日の我々には到底うかがひ得ない境地である。從つて色々な書物を通じて當時の時代世相を知り得ることもそれ等の句に對する感興は當時の人達に及ぶ筈がない。この缺點あるが故に今日の川柳家には時事吟は無價値のものとして顧みられないのであらうが、まだこのことに言及した川柳家がなく又時事吟に對して深く研究してゐる作家もゐないのである。自分としても前の大正日日で時事吟の選をして始めて興趣を覺へ、種々研究するに到つて普通の川柳よりも或る意味に於ては川柳の眞の川柳たる所は時事吟にあるのではなからうかとさへ思つたのである。

時事吟は要するに穿ち皮肉・諷刺と言つた寸鐵殺人的のものであるから或一面から見れば俗諺として標語として永久的に生命あるものもあるであらう從つてその格調に到つてはきびくしたものを採らなければならぬ。如何に内容が面白くとも格調を閲したたらくしたものであつては駄目である。

今度大阪市で募集した國勢調査宣傳の川柳の如きは矢張り時事吟である。『調査洩れ十年間は亡者なり』あまり名句ではないが時事吟としては穿ち得た句であらう。『昨日來て明日立つ人も數に入れ』の如きは想ひいひ、格調ともいひ立派な句である

時事吟の選は普通の選をするよりも更に難事である。取扱つてある問題の大小に依つて意味の不明なる場合がある。假令意味が明瞭であつても殆んど句としての生命のない凡句に陷つたものが多い。

次に前の大正日日に掲載された時事吟を少しばかり並べて小註し、時事川柳は事件を如何に取扱ふか考の資料とする。

奥　様になごと觀劇切手くれ　路郎
女教員流石に惚たとは言はず　同
算盤を置いて遊ぶも其の當座　同
生活改造急に椅子から買ひ始め　同
愈々の愈々電話度數制　同
殿様で暮せる身をば十二年　同
迷宮に署長晩酌ごこでなし　同
罪の無い者まで入れる寫眞班　同
崩落に身受もそれつきりになり　同
植木屋は今は何をかつゝむべき　同

以上の句で『奥様になごと』の句は松竹合名會社で始めて觀劇切手を賣り出したので女の好きな芝居蒟蒻芋蛸南瓜の筆頭に位するだけに『奥様になごと』一種の賄賂に利用されることを諷刺したものである。女教員云々の句は同じく松竹が觀劇の勞働者デーをやつて社會から非常に歡迎されたので引續女教員デーをやつた處が鴈治郎丈のあてやかさを見て賞讃の辭を惜まなかつたのに曰く『世間の奥様達が大騒ぎをなさるのは無理もない』そこで川柳子は流石に惚れたとは言はずに婉曲に突つ込んだのである『算盤を』は物價騰貴の餘映をうけて南地か藝娼妓の花代値上を實行したのでお客様の方から觀察を下したものである。『殿様で暮せる』は桑原子爵を詠んだもの『迷宮に』は女學生殺しの句『崩落に』は財界に一大變動を與へた四月を想起する句である。今にして思へば本町筋か軒を並べて討死するから殘るのは御堂さんと區役所と警察であると噂された常時南地五花街は火の消ねたありさまであつたのである。

右の外選擧騒ぎの時には

貴重なる一票鬼權なごと書き　半文錢
代議士こまで伊之やんも成上り　同
安藤は又も酒屋の借りが殖ね　同
もの入りついでこ板野思ふ也　同
中橋の宣言言文一致體　同
落選の味は木崎に判りすき　同
頼まれもせぬに嘉幸に入れたがり　路郎
演説に清瀬講義の口調が出　同
奥様へ電話のかゝる總選擧　同
總選擧遠い緣家な思ひ出し　雪山
の如き皮肉揶揄至らざるなく興趣は汲めども盡きぬではないか

□

時事吟で面白いのが出來たら見せて下さい。今年は總選擧であつたが川柳家で出た人があるかしら。

近作

麻生路郎

戀人が來てゐるらしい茶の間なり

春のすゐ氣違ひじみた手紙が來

思ひ切り書齋を一歩外に出ず

障子張るこゝを夫婦でゆづりあひ

疊がへ貯金を半分までも出し

金かりてまで嫁入りをさせるなり

一票へ夫人は足を二度運び

許嫁あめりか後家をたてゝほし

のみに來た友に家賃をきかれて居

前田房之助氏當選を祝して

新綠を議員となつて見る日なり

近作柳樽

路郎選

いち早く歸る夜店のカルメロ屋　大阪　松郎
運轉手切符を取るは義理のやう　同　同
佛壇の人を見ながら借電話　同　同
今日はよく人が來る日だなと女房　同　同
それで思ひだしたと夢を話すなり　同　同
家を聞かれて萬引は手を合ばせ　同　同
法界屋背の高いのが琴を持ち　同　同
わびしさはシツボク臺の濡れぶきん　同　同
洗濯の前を屑屋はボイと飛び　同　同
おいへからマントの釘みな掛けず　同　同
帶一つ締めるに下女の手をば借り　朝鮮　泰平樂
葡萄酒で里のふた親醉はされる　同　同
腕組みをして關取は寫させる　同　同

淋しくもあるか看護婦唄ひおり　同　同
住所錄轉々として筆を入れ　同　同
すき燒の味は男の箸で取り　同　同
憶病に成つたは小金出來てから　同　同
溫泉のあい宿かるい病なり　同　同
泣きじやくりする時咽喉が涼しくて　金澤　柊果
戀に泣くその嬉しさを背に感じ　同　同
咲くだけは咲くつもりなり罌粟の花　同　同
人間に忘れられたる日の强さ　同　同
顏洗ふ湯にうつりたる病呆け　同　同
いゝ柄を局の歸へりに見て歸り　神戸　一閑子
同情が過ぎて廓の心中沙汰　同　同
教へ子と一緒に歸る女教員　同　同

無造作に當分暇を願ふ　下女　同
だん〳〵と春になつてく帽子掛　同
死水も取つて呉れない子か殘り　同
醉ふ程に出して呉れぬは兄の嫁　少女櫻
暖かくなつて火鉢の嵩高く　同
教室で又豆本を見付けられ　同
私まで悲しうおますこしばたゝき　同
尺八の轉がつてゐる二階借り　同
一人來て突き出しの値も考へる　錦山
是れ程にしてもと思ふ嫁の胸　同
母親の帶が間に合ふ姉娘　同
共稼ぎこれほどにして喰べるだけ　同
玉葱が暇な八百屋で芽を出し　和歌山
バイブルの話持ち出す婦人にて　久樂
一錢を値切つていらぬ事を聞き　同
ほつたもの鶏は兎に角つゝくなり　同
子が二人こんなに髪がぬけました　稗島
船津橋いつもおんなじ船のやう　眠聲
手も洗へ顔も洗へと五時の笛　同
藥湯へ親爺は眠るやうに入り　同
呑んで欲し止めても欲しい酒を注ぎ　鳴尾

お互に酒量の減つた女房持　同
あの畫工腕をたのんで儲からず　同
母親の留守へ來て姉淋しがり　廣島
雨の日の襁褓頭にさわるこゝ　桃里
暇乞ひ子供は門で待つてゐる　同
五十年今日が昨日となつて過ぎ　同
上前を刎ねて親方醉つてゐる　北海道
小氣味よく言ふて煙草を強く吸ひ　句樂
ウエーター又失戀を唄ひ出し　同
背中へも手の及ぶだけぬつて居り　大阪
缺勤の電話寢卷のまゝで掛け　竹桑
居喰ひした揚句亭主に死に別れ　同
鐵瓶をあけて灰かく長煙管　同
デパートを出る風呂敷が無駄になり　神戸
貯金した所へ金を借りに來る　一笑
物貰ふ時の返事が別に出る　同
新世帶乞食にやつた錢も附け　同
お隣の子が買喰ひの癖をつけ　大阪
お腹から生れたことは他所で聞き　元山
金持ちに搾られる子をやたら生み　同
芝居裏つまづくやうに呼びとめる　同
西灘　同
提象　同
同　同
月の輪　同
蔓乃女　同

畫休み泣いてる女工だけ殘り　同
物貰ふやうに水道で手を洗い　同
夕刊を丁稚は先きに讀みたがり　同
鍋洗ふやうに下駄屋は磨いてる　同
また袖を千切つて戻る男の子　神戸
人間の病泣きたくなるばかり　夢遊
生きて行くために解決したのです　同
春は春紫色に黄昏れる　同
心配を親は勝手にしてるやう　同
古本屋あんな雜誌も賣る積り　同
女房の不平子供に直ぐたゝり　同
紙箱屋崩れて來ても逃げ出さず　同
道塲のやうに按摩の流行る店　同
新世帶何んぞ喰べたい癖がつき　東京
交番所向ひの仲居洒落を言ひ　盜泉
兎も角も調べて置くと歸すなり　同
姑の落度へ嫁は振りかへり　同
金持たぬのが健康を祝し合ひ　同
日傘からそれて脊の子陽があたり　同
蒼空とくつついてゐる峰續き　同
さかさまに先生算盤置いて見せ　堺
奥樣だなんだかんだとおだてあげ　一柳
算盤で引く直線のちと曲り　同
筍の土も日本の懷かしさ　同
湯上りのキッスをしたい我が子なり　同
プロペラの音三越の窓の人　同
二階借壁に南洲の額をかけ　同
此の秋は是非支店をと兄の口　同
あんまりのことに涙も急に出ず　同
牛の尻追はなくなつた講義錄　堺
成金の床道具屋のやうに見ゐ　一柳
結論になつて吸殼盛上がり　同
エレベーター待つてる暇に昇れさう　同
堅ければ堅いとて又噂され　同
京參り子供連たがいつちあと　大阪
心配もせねば世間へ氣が濟まず　義矢滿
泊り客主人と同じ趣味を持ち　同
思ひ出す同窓生に妻がある　同
行つて見りや廣告あまり大きすぎ　同
芦の角此處から春が來るのなり　柳骨
風車子供のやうな氣にもなり　同
松の内乳母もめかしてやつて來る　同
朝鮮　柳也
同　同
大阪　嶺月
同　嶺月
岸の里　秋葉
平野　廣賀
堺　夢六
粉濱　多聞
神戸　寸馬
大阪　順三
神戸　琴月
大阪　章太
大阪　双柳
大阪　清月
大阪　彌生
福島　冷笑
千舟　常夫
岡山　村夫
大阪　兎月
大阪　小人
堺　不越
函館　二三吉
同　同
神戸　番翁
同　同

句になる迄（一）

――添削改作句稿より――

遲日莊主人

いゝ想ひがうかんでも叙法が拙いために句にならないのもあれば、すらすらと調子よく出來てゐても凡想であるがために句として無價値なのもある。つまり内容と形式がぴつたり合致しなければ、ほんとにいゝ句とはならないのであるから實際、句となるまでの作家の苦心は容易ではない。

病人に知らさぬ工面して戻り　一休

これは心配といふ題で作つた句である原句は『病人の知らぬ心配の金を借り』であつたが句意の上から云へば、寧ろ『病人の知らぬ……金を借り』だけで充分である。『心配の』といふ三字のない方が反つて句意に餘情を見せはすまいか。しかし『病人の知らぬ金を借り』だけでは川柳としての姿が整はない。そこで前掲の如く多少の改作を施して見た。これで、やゝ句の内容に複雜味を加へ、形式の方から云つても、纏まつた句になつたやうに思ふ。

出る杭の打たれる事をつい忘れ　南耕

小の虫殺した事も無駄になり　同

共に狂句である。作者は斯うした内容に對して疑問を懷いて居るやうであるが單に格諺を逆に取扱つただけで川柳としての價値はないものと思はれたい。

花吹雪正面にうけて嬉しがり　月の輪

調子はこれで出來てゐる。人物はハツキリせぬが、情緒はうけこれるまづ〳〵川柳としては無難であるが『花吹雪』の應募句とすれば沒になる句である何故であるか。それは改めて云ふまでもなく想に於て月並たるをまぬがれぬからである。秋の月は誰が見ても悲しく感じたものであるが、いかに悲しく感じたからとて秋の月は悲しいといふ句を後人が詠んだのでは作者の手柄とはならないのと同じである。

森永で煙草をやめたことを知り　一路

講義錄新學年も同じ本　同

前句はいつも煙草をぽか〳〵ふかしてゐる人が、手持無沙汰と口の淋しさから森永のミルクキャラメルを口の中で、もぐ〳〵させてゐるのを見て『ハハア煙草を止したんだなア』と氣づいたといふ句である。原句は『森永で煙草はのまぬことわかり』であつたが、これでは句としての働きが足りない。後句の『講義錄』は穿ちの句であつてまづ〳〵無難の作である。要するに句になるまでには内容と形式について多くの研究を積まねばならないのである。

本社三月例會

二十三日午後六時於端の坊

路郎、水府、竹人、淮午、幽香、溪花坊、史風、彩峰、輝翠、竹槃、眠聲、徹底郎、嶺月、蹄二、麥郎、順三、双柳、零骨、助六、廣賀、秀坊、蝶二、笠人、清月、百石、京石、波郎、光太樓、實、春篁、柳骨、千代二、茂男、薫、五葉、木念仁、古城山、啞人、二柳子、芦穂（來會者名簿より）

心配　廡生路郎選

心配な人にも朝の富士が見ゐ　水府
心配の襖をあけて入りにける　同
いそがしく甥の心配して居れず　久流美
心配は毒さ、銚子斜になり　同
心配の膝とは子供知らぬなり　徹底郎
心配に机は役に立たぬもの　彩峰
心配な姿が映る塗簞笥　順三
飲み仲間其の心配はよし給へ　零骨
心配を持つて一日濟ますなり　薫
心配は横になつてもつきまとひ　竹人
心配も知らずに子供伸びて行き　右平
心配はカナリアの餌が減らぬ也　茂男
心配を沈めるように髪を撫で　進午
心配の母義理の子の智慧を借り　清月
氣のりせぬ返事に母の氣を廻し　啞人
心配を課長笑つて歸すなり　古城山
心配に覗けば早い橋の水　蝶二
奉公にやつて毎晩おなじ夢　光太樓
心配の肩を暖簾になぶらせる　蝶二
心配をイッチの兄が聞かされる　助六
心配の胸を擴げて添乳也　幽香
心配に賑やか過ぎる戎ばし　舟人
打明けて下さい心配ですこいひ　彩霞
嫁入つてから心配のあるを知り　一閑子

○

氣短に立つ心配はけつまづき　路郎

不孝　淺井五葉選

不孝者佛間で兩手つかされる　竹人
不孝者髯を生やして詫に來る　溪花坊
三味線が今は不孝となつちまい　麥郎
働きは不孝と知つてからの事　波郎
片親へ未だこの上の不孝なり　笠人
名門の家に一人の不孝者　百石
不孝をば心にわびる枕なり　蝶二
不孝者今日も同じここに行き　柳骨
三味線も不孝で聞くは物淋し　蝶二
友達かちと多過る不孝者　古城山
新しい位牌へ不孝策をたて　輝翠
兩親を若く見てゐる不孝者　彩峰
それ春だ花だ酒だと親不孝　古城山
脊が伸びて親へ逆らふこゝばかり　溪花坊
不孝者喜劇役者こまではなり　路郎
艶歌師の不孝な聲を暗で出し　蹄二
孝行の譯を知つてる不孝もの　嶺月
三年目不孝な兄をめぐり逢ひ　同
不孝者同志が遇ふた畫のバー　波郎
敵娼に不孝な顔でもてるなり　彩峰
臨終に不孝を怖いことをきゝ　芦穂

藝術に生て不孝な者ゝされ　進午
新聞に廣告が出る不孝者　光太樓
不孝者オールバックの友が殖ゑ　茂男

五　容

局待を打つて不孝は酔ふてゐる　啞人
はつきりゝ位牌が讀める不孝者　徹底郎
月並の御異見をさく不孝もの　茂男
大騒ぎさせて不孝が歸つて來　順三
死ぬるのを待つて生れた家を賣り　路郎

人

親は親俺は儲けて遣ふなり　彩峰

地

創作でみるゝ不孝な男にて　水府

天

自動車に不孝を知つた乘心地　同

○

不孝者雛れたまんま生きてゐる　五葉
不孝者顔を切られて歸つて來　同

女湯　互選

女湯へ燕のやうに這入る也　路郎
遺憾なく洗ふて浸かる女風呂　五葉
女湯の方もおんなじ手をたゝき　零骨
お隣ゝ一緒に長屋風呂へ行き　嶺月
兒を洗ひ乍ら女湯禮をいひ　進午
女湯にはいるを子供すねて居る　春篁
女湯ゝ知つた男のあわてよう　百石
女湯は自分に少し暇が入り　麥郎
女湯へ番臺知らぬ振をする　順三
女湯に顔をそむける若さ也　實
女湯で白粉瓶の破れた音　廣賀
女湯は盛んに泣いて手をたゝき　蹄二
女湯の方は乳から上が見ゑ　茂男
藥湯が滿員してる女風呂　廣賀
女湯へおもちやの舟も浮いてゐる　双柳
女湯で肥つた赤ん坊ほめられる　同
我が洗ふ頃くたびれる子澤山　木念仁
五月ゑ女房風呂から見て歸り　同
女湯ののれん低く重く垂れ　古城山
晝風呂の趣味を女湯がこわし　同
女湯を知つて遠つたやうに見ゑ　水府
女湯は降つた知らせに大儀がり　同
忘れられる頃女湯から上り　啞人
女湯は遠慮の背で暇が要り　同
女湯のちゝ挨拶に念が入り　竹人
相談をして女湯は手を叩き　同
女湯は捨子のやうに兒を殘し　蝶二
女風呂ゝ仰山にお手が鳴り　同
女湯の方へも朝の陽ざしなり　波郎
ぬるすぎる事を女湯まだ云はず　同
女風呂先刻の聲でまだシャベリ　徹底郎
女湯で子供が轉けた騒ぎ樣　同
同病相あはれみ女湯の長話　芦穂
女湯へ番臺言ふてあけに降り　同
女湯の下駄はきちんゝ揃つてゐる　同

扇　互選

ポケットから來賓扇出し給ひ　五葉
おこしらへ扇も背へ挾んだり　同
手品師は扇で一ト手二タ手見せ　路郎
昇降機扇子の風は女なり　同
舞扇お腹の減つたことを知り　溪花坊
松づくし腰の扇の拔けかゝり　同
貸した人を叩いて扇返すなり　竹人
壽の一字扇の尻で教へられ　同
扇投げつけて劍舞しまいなり　同

帶解いて扇まつすぐに落ち　同
踊場へコツンと落ちた舞扇　彩峯
張り扇これからどう云ふ叩きやう　同
話がとぎれて扇使ふなり　柳骨
扇をかゞにしたゝか大欠伸　同
かさね着に殿の扇は靜かなり　蹄二
扇から小さんに醉が廻るなり　同
襲名の扇に白井松次郎　同
新しい扇に帶をきつくしめ　波郎
爪彈きに首の扇がすべりそう　同
切話扇の音が耳につき　輝翠
扇箱賣ふ方でも洒落を言ひ　同
舞扇同じ手つきで二人立ち　同
强られて書く白扇に氣がのらず　同
夜あるきの扇の骨は離れたり　双柳
末廣を取換してる塲を覗き　廣賀
扇から一錢銅貨の出る手品　同
汗人れる乳母にわ扇小さすぎ　助六
かんてきを扇であほぐ新世帶　同
紐付きの扇半經程廣げ　同
後見をハラ〳〵さした舞扇　古城山
舞ひの手へヒラリと扇外れたり　史風
扇の繪一人は首を捻ぢて見る　木念仁
女の子扇眺めて欲しくなり　秀坊
新年の扇は開くものでなし　進手
舞扇疊へ落ちて拜まれる　同
お惚氣へ扇で煽ぐ程に馴れ　同
氣の毒な程掛合は叩かれる　同
俯向いて扇見乍ら願ひ事　同
相談の扇はなぶりものにされ　順三
格子から扇を入れて子をあやし　零骨
旦はんの扇は口に當てたまゝ　笠人
舞扇優しう投げてお辭儀なり　同
義理の母あるとは見ぬ舞扇　光太樓
ちつぽけな扇をさすも姿なり　啞人
滿員車扇は役にたゝぬなり　嶺月
姉藝者扇も輕く舞納め　百石
角帶へ扇何度も差し直し　徹底郎
帶解くと扇は落ちてから倒ける　同
天晴れな扇ひろげて幕になり　同
ちと要ゆるんで秋が近くなり　麥郎
帶解くと朝の扇がほんと落ち　同
立上る扇刀の樣にさし　同
隣の桝扇の風に報ひられ　同
支那扇贅やら詩をばのらへかせ　春篁
松づくしみなの扇を寄せて舞ひ　眠聲
舞扇自由にならぬ子も踊り　同
妓の翳す棧敷の扇灯に光り　芦穂
幕合の扇は波の樣に見ゝ　同

第十二支部句會

三月二十五日午後六時より六廣町事務所樓上に於て支部第一回句會を開く。出席者二十二名。盛況裡に十時閉會す。當夜函館川柳社、あづま、都ね尺東魚の諸兄より副賞の寄贈あり。御厚意を謝す（花）

席題『無邪氣』　互選

小半日子供と遊ぶ妻であり　松々
姐さんになると笑はす女の子　ばん蝶
極樂を聞かれて母の死がにぶり　茶化子
毛唐の子ベラベラとと喋り　里魚
妹は無邪氣にされてよく喋り　狂水

繪雜誌か一刪いつか灯がともり　花童子
あの頃の二人に戀もなく遊び　羽衣草
廻らない口で唱歌を唄つてる　光三郎
初奉公チト無邪氣なを喜ばれ　利喜馬
抱だかれて寫す無心の兒の瞳　二三吉
水鐵砲日向ぼつこの猫へかけ　千波
母さんを眞似一人形へませた口　喜多坊
父親の酒飯事にまねるなり　八郎兵衛
父さんは居ますと懸取へ喋舌り　六歩醉
貰はれて行くとは知らぬ風車　夢之助
言ふものゝ子供で仕方なく笑ひ　都ね尺

席題『一』　互選

一二三手形の文字に注意され　茶化子
長話し茶菓子が一つ殘つてる　登美二
一字宛拾つて植字判を組み　二三吉
一哩あると動かぬ手が數へ　松々
酒さめて見れば襲中無一物　八郎兵衛
婦人科で綿方一つ習つて來　東魚
一しきり忙がしく街は暮かゝり　ばん蝶
一品が八錢胸算して這入り　花童子
眞筆も一遍屆く選擧前　夢之助

暗がり踏み出す一歩をそつとおき　羽衣草
一息に干す盃洗の血走る眼　笑劍坊
儲けたい話一人が欠伸する　東魚
鞠遊び叱られてから一つ突き　一樹
一本を吸ひ終る頃銚子來る　同
母一人願つて桝へ割込ませ　六歩醉
一粒の胤じ可愛く育てられ　八郎兵衛
訂正の一字社長の判が要り　二三吉
一算に遠く番頭さんもおき　ばん蝶
もう一時今度の下駄も通りすぎ　羽衣草
母ちやんが一番好きと笑はせる　狂水
一本の草も靜かに春を待ち　同
ぬかる道板一枚に救はれる　利喜馬
一列に待つて改札氣かあせり　夢之助
時計屋の店一つ丈け合つてゐる　利喜馬

席題『船員』　二三吉選

上陸だ今度も無事だ飲み明かし　羽衣草
雨をいゝ事に船員陸で醉ひ　一樹
落ちて行く月に甲板の物思ひ　羽衣草
晝風呂で船員らしいのがふざけ　東魚
陸戀も海から海へ陽が落ちる　茶化子

甲板の月に唄つて子を思ひ　六歩醉
ある丈けの財布をたゝく碇泊地　笑劍坊
寄港地で辛棒する氣がまた破れ　茶化子
板一つ下が地獄の海に馴れ　二三吉

席題『口笛』　潮三郎選

遠を終へた口笛町を拔け　二三吉
フト若き心にかへつた口笛　夢之助
街つ角を折れて行く口笛　ばん蝶
涙のごはず口笛に泣きぬるゝ　潮三郎

席題『曲者』　花童子選

曲者の何を踏んだる足の裏　潮三郎
曲者の一人チャンケンボンで負　同
人好しと見せて拔からぬ儲け口　利喜馬
お妾の口で出世をした男　都ね尺
惡達者本氣の戀でないが趣味　夢之助
曲者の方が被害者より學者　花童子

眞面目な支部新設者を募る。

川柳雜誌社宣傳部

病牀にて

紋太

私は今年の一月にも十日許り臥ました。續いて今度は二月中頃から再び臥て終つたのです。兩度共三十何年の間病氣の味を知らないものですから却つて面白い經驗の出來ることを嬉しがる樣な氣分で居つたのです。處が今度は何しろ四ケ月に亘つても起きられないといふ狀態ですから一時は面白い處か一寸危なかつたのです然しお庇で病氣は一ケ月餘りで癒つたのでその後は衰弱の恢復するのを待つばかりになりました。至つて樂なそれこそ面白く病中を過ごすことも出來る起たら働かねばならぬ私に執つて一番暢氣なときです。それで諸方から頂いた雜誌や椎の實川柳社から借りて大分讀みました。それから川柳のことで種々なことを考へたり感じたりして病氣の時は平生より猶更さうした方へ心が向ふものと見ます。中でも私の心を動かしたものは五十日目頃に漸く四つん匍ひでこそ〳〵と、病氣以來初めて窓まで出て見た時でした。

窓の外は私の臥る前に同じ姿であつたのですずのに私の眼にはこの家の屋根も壁も窓も植木も電線もこれほど生き〳〵とした新しいものに見ねそこには脈々と波うつ生命を持つたものに見ねたでせう。その原因が久しく見なかつた物珍らしさ又は季節が春の目覺めの始まる時であつたにせよ物皆が新しく生々として私の眼に映ずるといふこと、この事が一年中、一生、日に日に新に蓮續したならば如何に私の生涯を慣値あるものにすることでせう。

私の今までの生活は餘りに平凡に無活動に逸樂に停滯してゐたのです。私の感覺は普通以上に出ない程に剛らされてしまい私の頭腦の働きは鈍角を呈するまで消耗されてしまつて私の眼の前には年中變化のない世界がごろ〳〵と轉がつてゐるのでした。譬へば、踏切を想へば空しく待たされる人の姿が浮び、床柱を想へば背を凭せて一座を眺めてゐる男を浮べ、鋏を想へば椽側が浮び、應接間を想へば手持無沙汰の男を聯想し、床屋を想へば新聞を浮べ、星を想へば嬉曳の男女が浮ぶ。私の感覺も

知覺も世間並のはたらき以上に出なく毎日々々同じ景色・同じ社會の出來事しか私に見せて呉れないやうになつて居りました世間が灰色に見へたら何時までも灰色であるかの樣に思ひ・花が咲いても木の芽が萠ゑ出ても只單に去年のことを繰り返すかの樣は思はせられてゐたのです。いや此麼ことの云へるのも皆病氣のお陰です。達者な頃には自分がそんな平凡に包まれてゐることは知らないで何故自分の川柳は巧く出來ないのか知ら、何故かう作つた句の半分も自分自身で取消さなくてはならないのだらうかとたゞ不安を覺ゑるのみであつたのです。

圖らずも今、舊いものが新しく見ゑた刹那に私の心は歡喜に滿ち〳〵て居りました。絶ゑず新しくあれ。これだと思はず心に言ひました。私の肉體はすつかり組織を代へて皮膚も骨格もまるで赤ん坊から又出直すと同然でした。この時こそ心から新しい生活が開けることを信じないで居られなかつたのです。

ところがその後の經過は段々私に悲しい結果を獅しました。といふのは　その歡喜の日からまだ二十日しか經たないこの頃の私は如何でせう。肉體の苦痛が去るにつけて傍人との俗務の交渉も追々殖ゑて來る。それに隨ふて私の以前の感覺が頭を擡け始めました。物皆が昔と同じ樣に見ゑ始めたのです。これは堪らないことです。まだ立つて歩くことの出來ない今頃からは此麼では若し平常の樣に私の仕事が始まつたなら又元の木阿彌です。平凡な何を見ても感興の乘らない生活が始まるのです

私は今坊主枕に頬をつけ乍ら、旅行とか何とかの刺戟のない毎日同じ勞働を繰り返さなければならぬ私の樣なものは、そして平凡の中に詩境を見出す才能を有ないものは實に不幸なそして憐れな川柳家であると思つて暗然とならずには居られませんでした。畢竟私などはよい句を作る資格が無いのでせうか（終）

▲松ヶ岡の狂句

阪井久良岐

狂句『戊を捨て申のかつこむ松ヶ岡』のをこのの論爭は（の）が正しければ（申）が主題となり（を）が正しければ（松ヶ岡）が主題となる差があり升。但『かつこむ』と云ふ語顚込むの意か飯を掻込むか判然しません。兎に角犬と猿の仲惡の夫婦と去ぬ去るの馱洒落たるは云ふ迄もない事ですから、此位で打止めにしたいと思ひ升。前號小生の句誤りありしは粗漏なりし、これは東魚君のを正しいと信用したいと思ひ升。

▲難句に就ての論點

路郎生

難句研究に對する私の論點は、斯くの如く文字を變更すれば句意が明瞭になるといふが如く、漫然と句中の文字を變更してはならぬこと。四苦八苦して氷解した句が案外詰らぬ句であるといふこと、たゞ難句研究の價値は難句となるが如き愚を繰返さぬための參考になるといふことにあつたので『松ヶ岡』の句に對する意見の如きは最早論ずるまでもない。右の句については前號の久流美・東魚・久良岐三氏の意見で氷解したこと、思ふから別稿久良岐氏の云はるゝ如く、これで打切とする。

募集句

眼病

矢野きん坊選

物干へ出て眼病の顰め面　蟬翠
くらがりで泣しる樣に目を洗ひ　雅幽
斗酒辭せず眼病のよな眼を開き　喜與志
眼藥と涙一處に溢れ出し　桃里
繃帶の儘眼病は退院し　双柳
手拭の事も眼科は言ひふくめ　助六
目の見めくらと乞食念が入り　琴月
盲目より眼病少しすなほなり　多聞
弟は來ず眼病は返り討　寸馬
うつむいて眼科の人は順を待ち　百石
眼病はハンカチでない布を持ち　月の輪
按摩でもするさと洒落淋し　夢遊
いきな病氣さと眼病からかわれ　松郎
唄ふても見る眼病のなほり際　同
さし過ぎて眼藥耳のほへ流れ　句樂
近眼へ見ゐるかと指す榜示杭　同
仰向いてさす目藥は口を開き　同
眼が悪くなつて父親急にぼけ　同

五客

眼病と云ふ程じない眼鏡なり　一洲
眼病は他人のように扱はれ　劍一郎
近道をしない眼病智恵がある　同
按摩また見ゐなくなつた譯聞かれ　句樂
痛い眼を眼醫者はむごい洗ひ方　夢遊

人

眼を病んで居間に木の芽高く伸び　順三

評　鋭い主觀句である、木の芽時と眼病と云ふ因襲的概念から聯想された句とばかりは思ひない、新緑の香高き明るさの中に有つて獨り眼を病む悲哀を遺憾なく發揮した述懷的詩境がよく現はれて居る

地

眼病と眼病醫者の話なり　百石

「待合室のに於ける患者と患者の對話が髣髴される、あれもして見たさと虐げれて

川柳稻荷會

四月四日運日莊で河盛蘆村翁主催の川柳稻荷會が開かれた。來會者は路郎、葭乃、かほる、史風、徹底郎、蘆穂、一洲、松雨、輝翠、古城山、彩霞、二柳子、不盡、蘆村。

家主　路郎選

首つりがあつて家主も呼び出され　松雨
選ばれて寢てる家主の戸を叩き　芦穂
(人)家主の言葉に亭主顔を出し　徹底郎
(地)善人と言はせて家主上げられ　松雨
(天)動かない襖へ家主拜まれる　輝翠

蠟燭　互選

蠟燭の明りで路次を見送られ　輝翠
蠟燭を質つて飛脚歸るなり　葭乃女
一寢入りまだ蠟燭は消へていず　芦村
蠟燭をコハ〳〵提て來る女中　史風
戸を開けて蠟燭へ別な風が吹き　二柳子
町はづれ蠟燭たして急がれる　同
蠟燭のまたゝく毎に聲は冴へ　莢豆
電車から蠟燭の灯を見て通り　同
蠟燭の灯だけが光る御本堂　松雨
蠟燭を一本入れて禮に行き　同

居る」の句に似通つた患者心理の適切なものである、敍法にも修辭にも無理のない佳句であると思ふ

天

眼病が笑ふと涙一つ落ち　芦穂

デリケートな觀察眼である、そこに滑稽と悲哀が錯綜されて微苦笑を禁じ得られぬうまさである。川柳はこう行きたいと思ふ。

軸

慰めてやれば眼病膝を撫で　きん坊

叔父

出雲屋で叔父だけ酒を注文し　廣賀

叔父さんが來て暖かな玩具箱　島石

郷歸り叔父は驛までついて行き　薫流

叔父の癖眞似ると叔父はほめなり　二三吉

代議士の叔父まであつて不心得　百石

汽車見れば叔父ちやんどこへ行たかり　提象

勸當は叔父も愛想がつきた頃　一笑

極道の叔父瀨で戻つて來　多聞

永いこと叔父出戻りの姿なり　村夫

口よりも叔父御は腕が達者なり　茶々丸

婚禮に叔父の謠が役に立ち　枝呂

面倒になつて叔父さん呼んで來る　彌生

博士號貰つて叔父に顏がたち　雲川

叔父さんは土産について嘶出し　柳骨

相元紋太選

大阪に叔父があること一寸聞き　眠聲

貧乏で義理の叔父さん義埋をたて　双柳

だし拔叔父さんを招夜半過ぎ　伯洲

落ぶれて叔父も相手にして呉れず　呑氣坊

叔父と言だけに燒香念が入り　桃里

久々で簡單に飲む叔父の唄　一洲

衆議院議員の叔父を鼻にかけ　松雨

叔父が來て赤ン坊の名も決まり　零骨

後見の叔父にすまない事が出來　小山

卒業後赤靴穿いて叔父に逢ひ　秋葉

目の黑子朧けながら叔父を知り　少女櫻

結局は叔父の力を借りて來る　輝翠

兎も角も叔父引受けて事がすみ　夢遊

叔父よりも從兄の方に智惠がかり　同

蠟燭に半分暗い嫁の顏　彩霞

蠟燭屋町の端れに店を替へ　同

歯が拔た樣に行列灯が消へる　徹底郎

若後家が蠟燭かげる美しさ　同

藏の棚何年前かの蠟の跡　古城山

辻待ちに蠟燭の灯が經ち過ぎる　同

蠟燭を日那のうしろからともし　路郎

停電に蠟燭机だけ照し　同

停電に滿中院を思ひ出し　同

蠟燭が名殘を惜む樣に消へ　芦穂

立いてる眼に蠟燭の灯がかすみ　同

鐘一ツ添へてお寺の御蠟燭　同

蠟燭の餘分も持つて飛脚立ち　同

第五支部小集

開店、犬

開店を待つ看板のよく目立ち　飛水

開店の今日おみくじの吉が出る　同

開店の外は冷たい雪が降り　同

開店の主人に別な聲が出る　幸堂

開店に暖簾のうごく忙がしさ　同

開店に店一ぱいのビラになり　猪太郎

土地の名を叔父の頭へつけて呼び　不越
又叔父に足運ばせる内輪　揉め　同
叔父さんに抱かれて歸る紙袋　一閑子
中學へ叔父の家から通はされ　同
三越で洋食たべた國の叔父　凡平
叔父さんと來て蠣船に醉はされる　同
貰ふ氣がかるかな叔父は眞面目なり　一柳
赤貧の叔父を途中で見て歸り　同
戀知つて言ひ憎ひ事叔父に言ひ　寸馬
學資金中途で叔父は仕送らず　同
離緣の身一ト先づ叔父にあづけられ　順三
たまに來る叔父が願ひの借用證　同
叔父さんと父とが決めた許嫁　竹榮
月末に返すと叔父は借つて行き　同
頼まれた手前いやとも言へる叔父　琴月
久々に訪へば叔父さん呑んで居る　同
地玉子の錢叔父さんは置いて去に　助六
挨拶をあとに叔父さん枕元　同
母も親も叔父が歸ると氣が弛み　雅幽
言ひ負けた叔父はお前はまだ若い　同
けむたいながらも叔父であれこそ　喜代志
貧乏な叔父の意見を鼻でうけ　同
二三日置いてはやると叔父が言ひ　一聲
病人を笑はしてゐる國の叔父　同
轉校の當時は叔父に預けられ　芦穂
叔父さんへ早や馴れてゐる男の子　同
叔父の背中の入墨を見る　松郎
後添も貰はず叔父の若いこと　同
（佳）母の事叔父の話に安心し　常夫
タンボの咲く頃叔父に連れられて　零骨
嘘の樣な話を叔父に聞かされる　久樂
就職難まだ叔父さんの世話になり　嶺月
永い旅から叔父さんが歸るなり　久太郎
打あけた話へ叔父は智恵を貸し　二三吉
一人しかない叔父さんが邪魔かられ　輝翠
無心狀何う讀んだの叔父が來る　夢遊
樂なとき勝手に叔父を遠ざかり　一閑子
叔父さんは何でもくれる人にきれ　凡平
商の手段を叔父へ相談し　順三
叔父さんの寺子屋時代嘘もまぜ　月の輪
叔父さんに聞けば兩親苦勞して　同
催促に來て水臭い叔父にされ　芦穂
開店に割合高い品を買ひ　末男
受取を書く頃犬も馴れて來る　飛水

第十一支部小集

帶。心。散歩。火。下駄。雪洞。
轉寢。小說

ゴム草履散歩に輕いほこり立て　眠聲
プロペラの音に小供は下駄を提　一洲
小說を讀んで覺ゐた口說き方　すゝむ
雪洞にさゝやき程の風が吹き　同
心にもない世辭が云へ役に立ち　なまづ
雪洞がちと邪魔になる踊りなり　同
新妻を迎ゐて見ゐる洗ひ下駄　一笑
火事といふ電話に飛車はなったが　春峯
盡すだけつくして人にうたがわれ　同
轉寢にもう牛鍋の沸ゐる音　同
罪とがもないのに帶を解かされる　同

遲日莊偶會

子供服

子供服電車をいつち先に降り　路郎
子供服その親にして贅澤さ　同

あの叔父に似た父親と聞くば　同

謄本で見ると養子に行つた叔父　松郎

選後にしるす

叔父といふ題に拘泥してこの句集を見たら恐らく抜ける句はないだらうと思ばる。大半の句は甥を詠んだので〆めてゐる。後は母であつたり娘であつたりしてゐる。抜いてある句でも叔父を伯父と變へても構はない、もと〳〵私は題意を極端に保存することは考へものだと思つてゐるものだから私にさへ佳句であつたらよい主義で採つた。

叔父なるものは甥に對してよく異見をするものだとか、放浪性を帶びてゐるものであるとかいふやうな概念をまざ〳〵と見せつけられるやうな句は採ることが出來なかつた。併し概念を利用することに私は反對しないから中には採つたものもある。概念に因はれた句は厭である。

同想句の多いことは新しい人の多い募集句としては當然であるが例に依つて擧げて見ると年下の叔父、叔父と似てゐる甥、紅燈の巷で叔父に會び、叔父の昔話、父親より叔父は粋叔父の秋を脱ふ子供、其の他澤山

同想句の生れる原因は種々あるであろうけれども概念を突破することが出來ないこともその中の一つである。然し多くを見てゐない新しい人には無理な注文で、我々凡才は如何でも其處を通られればならぬかと思ふと無駄な勞力を費すことが實に慘酷な事と思はれる。この解決策は要するに總てに努力するより他はない。

かうは云ふものゝ自分も叔父を作つて見やうと思ふと忽ち概念の因はれに罹つて中々脱し切れない、出來たのを見ると「父親と正反對に叔父は說き」「妹の子と相撲して敗けばかり」前句は叔父の異見を云ふたに過ぎないし、說きが拙劣、後句は叔父になつてるのは赦すとして妹の子は少しこじつけた氣味あり即ち題に因はれてゐる、これを若し叔父の題で百句二百句と作つたならば佳句が生まれるとは云はぬが概念だけは突破することが出來ると思ふが今はその努力をする時間がない。

紋太生

あり教師なら叔父さんも知つてゐる　同

子供服呼んで記念の寫眞なり　同

コスモスに潛れて通つた子供服　芦穂

子供服無邪氣な膝が見ゑてゐる　同

この椅子で足が短い子供服　同

子供服近所を眞似たのではなし　輝翠

子供服着せても一度抱き上げる　同

去年のが間に合はされぬ子供服　同

洋服の子供辻まで先に出る　徹底郎

子供服姑の氣を兼ねて買ひ　同

坊の服短くなつた賴母しさ　同

幼稚會（大阪）

遠足　鳥

遠足に嬉しいこいふ顏こ顏　元山

遠足の先頭に早や橋を越ゑ　同

遠足を母は戸口へ送り出し　同

遠足に初めて海を見て歸り　同

鳥屋町小鳥屋へもう春が來た　同

遠足で勞れた顏も見る車掌　小人

登山隊もう降りて來る人に遇ひ　同

遠足に草鞋の紐のしまり過ぎ　同

襖

吉川啞人
竹田芦穂 共選

○ 啞人選

癇癪は襖へ音をたてゝゆき　一聲
お銚子の片手に輕い襖なり　松郎
顔出した襖に知らぬ話振り　冷笑
張り替へた襖へ子供寄せつけず　輝翠
先づ兩手かけて襖を娘出る　同
その刹那襖倒れた賑かさ　雅幽
容體を襖の外で確かめる　同
結納と聞いて氣をもむ襖越し　一洲
右の手が襖へ添へて用をきゝ　桃里
張替へた襖の名畵氣にかゝり　呑氣坊
骨だけが殘る襖の裏長屋　伯洲
ぼろぼろの襖かついで火を逃れ　清月
切れ話襖の外でちらつきゝ　眠聲
病上り襖の蜘蛛を見つめてゐ　柳骨
山寺に歴史を誇る金襖　雲川
姑の叩く煙管を襖越し　彌生
賴母子を落して入れた襖なり　助六
小笠原襖はスーツとよく辷り　松雨
引越に此所の襖も引つ懸り　飛水
聞き馴れぬ聲へ襖が細く開き　句樂
新建の家へ表具屋はめに來る　竹榮
朝刊に襖があいた枕元　順三
くづの葉を思ひ出させる襖の字　一笑
腹立て閉る襖は二寸あき　錦山
やくたいな襖道具屋ごうすゝ氣　一柳
進化して襖はいつかスリ硝子　提象
アイウエオ襖を書いて叱られる　凡平
襖をしめ〳〵引子洒落を云ひ　百石
〳〵切つた襖に暗い五燭光　一閑子
隱居の部屋の襖の輕い音　二三吉
襖越し世間話の合住ひ　不越
幻燈は襖二枚へよくうつり　廣賀
女の子襖の下を持つて閉め　秋葉
病室の襖は一寸づゝにしめ　小山
あんまりな事に襖をけつて立ち　零骨
要領を得ない襖が憎らしい　同
寶物と共に襖の古びよう　久樂
逃げて來て襖の影へちゞこまり　嶺月

東京にて

久流美

東京へ出た。けふはメーデーの日、勞働歌をうたつて行く行列を和田倉門のほりで見た。然しそれよりもお堀のふちの花を見てる方がいゝ。それに國の新聞をよんでる人がゐた。オレの句が出てゐたから一寸覗いて見た。話しかけたらその男は能登の七尾の者やつた。『三日すりや忘れられない劍をさけ』といふヒゲの人達が隊を組んで御座る。ナントいかめしい事じや。

寄せ書から（東京）

おでん屋で選り喰ひする通をいひ　鞍馬
男ばかりの翁やの客省二
權現へたま〳〵詣る茶人帽　盜泉

第十一支部より（東京）

岩崎柳路

先生のお手紙拜見萬事よく譯りました私は遺憾ながらマラリヤ病にて先月の二

引越して要らぬ襖が二枚出來　夢遊

五　容

足音に襖へ四つの眼が光り　劍二郎

一字づゝ讀んだら讀める襖の字　琴月

金閣寺　襖の由來きかされる　柳路

上段の襖　左右にサット開き　寸馬

探幽は四五人溜るこ教ゐられ　多聞

人

富士の山襖四枚へ股をはり　月の輪

地

雪洞が瞬いてゐる金襖　少女櫻

天

牡蠣船の襖は開けるものでなし　松郎

○　芦穂選

張り替ゐた襖へ子供寄せつけず　輝翠

諦めた夜から襖を締て寢る　同

總踊サア〳〵襖外したり　多聞

大胡座襖へ脊をごつこ付け　零骨

舞淩へ襖の影の首も伸び　同

大一座合ひの襖を取拂ひ　句樂

又襖破る子供を連れて來る　不越

袖丈けをも一度襖越しに訊き　二三吉

足音が襖へ響く子がかへり　同

〆め切つた襖に暗い五燭光　一閑子

次ぎの間へ四五寸開けて言ひ　月の輪

引越た此處の襖も引かゝり　飛水

燈明で襖へ忌中髷の影　助六

富田屋の襖に太鼓持ちの影　松郎

開け閉めの襖に娘らしくなり　學遊

間貸して合の襖はあけられず　同

結納〻聞いて氣を揉む襖越し　一洲

安普請襖は押され引張られ　喜代志

雪洞が瞬いてゐる金襖　少女櫻

お願ひは襖の外でかしこまり　喜代志

(五客)寶物ここもに襖の古びたり　久樂

間につけた名前襖の繪に因み　同

親鼠子鼠襖鼈けのぼり　村夫

三方の襖に宿こ云ふ氣分　順三

襖から覗いて酒の座をたゝせ　小山

(人)お誂子の片手に輕い襖なり　松郎

(地)逢狀に嬉しく襖あけられる　百石

(天)山寺に歴史を誇る金襖　雲川

十日から入院して居りますが中頃には退院出來ますから御安心下さい。一時は四十二度の熱で自分ながら驚きましたが今は平熱です。只ホームシックのみです。そのやうな場合に大阪宅より男子無事出産の電報が着き小澤山の私には嬉しくもあり悲しくもありました。男の子ばかりです。これで四人目です。私が體が弱いから丈夫な樣に、重たい樣に重夫こ名付けてやりました（中略）病氣の方は御安心下さいませ、すぐ退院出來ますから（中略）十六日迄に兼題は送りますから何卒よろしく。病氣で滝の句會へ本月行けなかつたのが殘念でした。本誌の改造を希ふは頁數を、もう少し增していたゞきたいものですが如何川柳塔へは同人全部の人が必ず載せる樣にしては如何（下略）

各地柳況通信を募る

各地の柳會の會報でも、その土地に於ける川柳家の狀態でも何んでもよろしい。愉快に讀めるそしてお互に親しみを感じるやうな記事を送つて下さい。アラ探しや中傷は御免を蒙ります。小集なごの句報も結構です。（編輯小僧）

川柳書架【一】

川柳を作つて見たいが、一體どんな本を讀めばいゝでせう？といふ質問をうけます。其時に、キリスト教信者が『バイブルをお讀みなさい』といふ調子で私達がいひ得る川柳入門書のないことを甚遺憾に思ひます。『柳樽』をお讀みなさい。しかしいゝ句もあれば惡い句もあります。と一々ことわらなければなりません。それにしても何か參考書は必要です。『川柳書架』は初心者のためにこんな本もあるといふことを知らすために書いたのです。だからつまらない本も棚に載せることは承知しておいて下さいしかし、どんな拙らない本にも何か一つ位はいゝことが書いてあるものです。

川柳を作る人に　（井上劍花坊著）

▲著者序文の一節『五月三十日（大正八年）に筆を起し、六月十六日に全部を書き上げ、その後は校正の時、僅かに字句の修正をした位の事だから、言ふことも前後したり、材料が見付からなくて其儘になつたり、部分的に批評の目を向ける人が有つたら、恐らく其疵だらけなるに驚きもしやう、がともかく劍花坊が十有七年の心血を一氣呵成にこの小册子に灑いだことはたしかである。これから後勉強して無論これ以上には進むつもりだが、今日までの劍花坊が精神的財産は、こも角此小册子へ費消したと云つても可い、短い、長い月日の間に何を爲したか、と問ふ人があれば、これを爲した、と答へるツモリだ、嘘は云はない。飾りもしない、それが有りの儘である』云々。

▲目次を覗いて見ると、新川柳とは何か。新川柳の傳統。新川柳と連歌。俳諧から古川柳へ。元祿時代の川柳。俳諧七部集の川柳。古川柳の歴史明和の川柳點。萬句合の古川柳。古川柳の作り方。川柳點と露丸點。川柳點と幸々點。南華坊と雲皷。川柳點と收月點。柄井川柳の傳。俳諧柳樽の價値。古川柳の醍醐味。武玉川と俳諧鐫。古川柳の創作者。古川柳の變格破調。川柳の死と和笛狂句元祖四世川柳。百人一首と虎の卷。新川柳の興隆。川柳は一呼吸詩。世界唯一の民衆藝術。

▼初版は大正八年八月二十日發行。菊版半截二〇七頁、定價壹圓貳拾錢。發行所東京牛込、株式會社南北社。

▼川柳を作る人に、一讀の價値充分。

川柳集　（國民文庫刊行會編）

▲本書の『緒言』に國民文庫中の一編として柳樽を收むるに當りて、刊行會は予にその解題を求めたり　されど予が淺薄なる知識を以て徒に揣摩憶測の說を列ねんよりは、寧ろ中根淑翁が、嘗て雜誌『文藝界』に寄稿せられたる『前句源流』を採りて、そのまゝ解題に代ふるに如かじと信じて、翁及び『文藝界』發行所金港堂の

快諾を得、こゝにそれを轉載せしむることゝなしぬ。

この『前句源流』は、蓋し、前句及び川柳の史的研究として は、從來世に公にせられたるものゝ中、最も詳細なるものにして、翁にさりては、固より一時の筆のすさびなれども、その叮嚀親切にして 一言だも尚くもすることなきは、亦以て篤實なる翁が學風を窺ふに足る。

予にして若し川柳に就いて多少知る所ありとせば、その大半は前句源流の賚に外ならねば、前句や川柳に就ては、又贅するの要なきに似たり。但し強ひて一言を加ふべくば 前句の流行を、翁は唯元祿頃と云はれたれど、隨流か貞德永代記によれば『近江前句附』と稱して、貞門の全盛時代に既に江州に流行したりしものゝ如し。その點者は當初貞門の末流たりしが如くなれば、その後談林の盛期には、その前句附が大阪にも流行し來りて、談林の末派がこれが點者たりしに、蕉風の勃興以後、中流の俳諧は漸く蕉風に歸するとゝもに 談林の先達も、已むを得ずして前句附の句者をも兼ねたりしなるべし『咲くやこの花』といふ書には、惟中、圓水、來山、才麿、園女などの錚々たる俳人が選びたる前句附を集めたり。且つ談林俳諧、ことにその西鶴一派のものは、著しく風俗詩的傾向を帶びて、その句法も取材も、頗る前句や川柳に酷似したれば、往年岡田虛心亭主人は、西鶴の大矢數中より、川柳に似たる句を選びて日本新聞に掲げられたることもありき。されば川柳の名は江戸に限りたれど、その實は既に談林の俳諧に存したりしに似たり。この點も亦た固より翁の誤謬にはあらず 唯大概に記されたるに止まるを、聊か補ひおかんとするのみ。

又翁は極めて謙遜なる態度にて、前句の源流を强索するが如きは、唯消閑の餘戲に過ぎざるに似たり。さもあれ、安永天明期の川柳は、一面には經快にして敏捷なる江戸の市民の氣風を代表し、その黄表紙、蒟蒻本、狂歌及び洒脫風や江戸談林の俳諧とゝもに、我が文學史に前後無比の滑稽洒脫なる時代を作れるものにして、他面には、歷代の民謠とゝもに、文學者こいふ專門家の思想にはあらで、眞に國民自身の思想感情を、さながら描き出させる文學として、文學史家の最も尊重せざるべからざるものなるべく、これが起源と變遷とは、學徒にとりては極めて重大なる問題なるべし。翁が前句源流を讀まんものは、先づこゝに注意して、翁の謙辭を誤解することなからんことを要す。(大正元年師走佐々醒雪識)

▲本集の內容は中根淑氏の『前句源流』及び『俳風柳多留』の第一編より第四十五編までを收めてある。大正二年一月五日、東京神田區小川町一番地國民文庫刊行會の發行。非賣品としてある。菊版。『前句源流』六八頁『柳多留』七九六頁。

▲柳書の聖典であるが、たやすく手に入り難いうらみがある。

川柳塔

○　武田彩霞

もう少し考へて言へ貸してやる
双親の前に並んだ身代金
今朝起きて昨夜の心飜へし
結び方が變つて嫁にゆく噂
開け放つ窓を流れる春の色
火葬場考へさせる煙を出し
相談をたまゝ受けて金が要り
社長室給仕遠慮もなくはいり
世界地圖日本も矢張り赤くぬり
袂から豆の葉出して詫を言ひ

○　太田徹底郎

仕舞風呂今手拭を絞る音

私設　無線放送

▲眞面目で賣込んでゐる芦穂クンが昔だつたら女人禁制の高野山へ女を連れて上つたといふ噂がパッと立つた。お國のお母親だとはお釋迦樣でもお存じのない話

▲『重大なる結果』をかもすかも知れぬが路郎センセイで品行方正の二柳子クンが脱線したといふ噂。

▲第一支部の句會に來る筈であつた、零骨クンの姿が見ぬので一體どうしたんだらうと案じてゐたが、今頃は妻君と羽衣の別れといふやつをしてゐるんだらうといふことに衆議一決したさうだが遂に姿を見せなかつたとか。

▲第五支部會員の幸堂クン、文化生活向きの家をさがしてゐるさうです。小集會場つきの家といふんだから一寸六ケ敷いて。

▲社の印刷所の所員がやつて來て、こゝに森田光次クンが來ますかといふ。社主

爛熟の花に疲れる法界屋
十三の春と同ンなじ指の節
水仙を活けて火鉢の置所
抜毛買ひ亭主は永い床につき
エプロンの下に預けた子の乳房
此色の薬を母も飲んで死に
意の如くならず女房も飲み習ひ
お針子の募りくて一張羅
手切れ金預金で足らぬ高で攻め

○　亀井花童子

角帶で今日から店へ出る養子
女店員百圓札へ改まり
降つて來ましたと女房燗をつけ
寄宿舎の廊下紙屑籠を提げ

○　黒木莢豆

コホロギの泣く如な戀の乙女です
河鹿さんあきらめて泣く聲ですの
うつかりと調子に乗れぬ身分なり

曰く『輝翠クンのことかネ』その男曰く『いや光次ですが、それでは養子に行つたのですかもわかりません』と云つたさうだ。

▲第一支部會員の克己クンの店で、宣傳ビラに自分の顔を刷つておいたところがソレをながめた啞人クンの長男曰く『この顔は古本屋の叔父サンだよ』（よの字）

▼同人一家と病魔

四月の末から五月の初へかけて同人の一家は病魔の襲來をうけて大閉口、從つて社務に差閊ひをさせることが夥しい。啞人が悪い。啞人の子供が悪い。松雨が入院する。芦穂が胃腸を損ねる。妻君や子供がブラ〳〵する。僕が疲れてへたばる。一柳子に腫物が出來る。徹底郎の娘の子が足を怪我する。妻君が腹痛をやる。柳路が入院する。一洲の子供が悪い。零骨が氣管支加答兒で注射をする。しかし雑誌は出て行くから心配をせいでもよろ

表情の娘の罪は言はぬなり
殺されるこゝに雀はなれて來て
鶯の聲は昔のうらゝかさ
その中に誤解の首も落ちてゐる

○　闘本雅幽

おほまかな車掌のために出來心
奥樣が出て來て弱い代表者
内の子は寄つてたかつていぢめられ
人の世話女房うるさい顔になり
潔く散つて御陵の靜なり

○　竹田芦穂

人知れず覗く寫眞こなりにけり
市視學へ校長さんの歩きやう
金貸した弱さを俺は知つてゐる
添乳する間子守は庭を掃き
ノックする扉を心は越ねてゐる
眼を病んだこゝを悲しむ裁ち違ひ
强敵こ褒める度胸を持つて呉れ

しい。もう病氣もこれ位で締切るから、その後の病魔は一切うけつないこゝにする。（編輯の日に路）

編輯後記

◇編輯室は雨が降づても風か吹いても同人が入り代り立ち代り詰めかけて、賑やかに事務をこつてゐる。

◇私達の愛する川柳のだめに、もつこい〻雜誌を出したい。そして讀者によろこんでもらひたいこいふ外に他意はないのである。

◇川柳雜誌は此の種のうちで一番纒まつた雜誌であるこいふ新聞の批評や讀者の讃辭を聞くたびに、うれしさがこみあけて來るけれども自惚るには未だ〳〵早い

◇私達は人ば懸命になつて、それ等の讃辭に酬ゆるだけのものにしなければならない。こ同時に從來の川柳家も、本誌の愛讀者も共に〳〵本誌を發展させるために助力されたい。

番傘にあまる荷物の小商人
斯うもすさむものかと晝の風呂を出る
陳列のその柄にさへ春の色
抱いた子の指さす方に東西屋
掛取りへ恩を忘れた口を利き
英チルの姿金魚の瓶へ立ち
新調の簾に梅雨の少し冷ね
寶石屋唯無造作に値を申し
聊かの風が氣になる火事になり

酒井零骨

○

遲刻する事も忘れて髭をそり
抱へ車夫坊やのかたき打ちに出る
床店の話こぎれる鼻の穴
郊外へ來て葬式は肩をかへ
まゝつ子の樣に鮮人立ちあぐみ
川べりをこぼれる樣にゴモク船
妾宅へ早や張り込みの手は廻り

○

橋本二柳子

◇四月は花見月で一般に句に油が乘らぬ從つて句會をやつても寄りがわるい。殊に本年は總選擧を控へてゐるので會場が選擧の選惡共に掠奪され、あいてゐる日までも貸切つてゐますのでこゝわられた。それで本社の例會を休んでしまつた。川柳稻荷會で同人が顏をならべたのは、せめてもの心遣りだつた。

◇しかし支部句會は、なか〳〵盛んだつた。大阪でも神戸でも函館でも開いた。句報は次號で發表する。

◇前號は印刷所のお花見と選擧運動の宣傳ビラなどで本誌の定日發行を三日も遲らしてしまつた。本號も選擧の印刷物がたゝつて定日には出まいと思ふ。理想選擧は本誌の發行日のためにも、のぞましいことである。

◇本誌創刊以來、編輯事務に奮鬪してくれた竹田蘆穗氏が、すぐる日から健康を害したので編輯部は益々多忙をきはめてゐる。一日も早く快癒するやうに愛讀者

首を振る程には鳩の拾はれず
古本屋讀んで居るのを買つて來る
持ちかへて剃刀やつと用に立ち
溫室の硝子へ蝶がつきあたり
蠟がたち話のつきぬ別れなり

宮内一洲

○

靈柩車眞一文字に尾が續き
船遊び燐寸の箱も役に立ち
切り詰めた心の底が知れて居り

岩崎柳路

○

都々逸であてこすられる久し振り
日記帳すみ子の寫眞はさんでる
塗りたてのコンクリートへ犬のあと
ビールなら呑んで見ますと女房云ひ
公然と呑み逃をする飛鳥山

太田一聲

○

叱られた子供敷居の外で泣き
竹の皮あけて隣りの子へもやり
轉た寢を註文取りに起される

と共に祈りたい。

◇西垣松雨氏が突然入院した。これ又一日も早く癒つてもらひたい。

◇山口縣の會員、吉川市助氏が令弟の吉川啞人氏と共に來社された。

◇井上凡平、横田眠聲兩氏から句箋を寄贈された。好意を謝す。

◇相元紋太氏の病氣は、餘程よいさうである。本誌へ『病床にて』を寄せられた

◇小泉飛水氏は復習のため廣島歩兵第七十一聯隊機關銃隊に入隊した。

◇酒井零骨氏は大阪市外濱寺町羽衣二六一へ移つた。同時に第三支部も同所に移つた譯だ。

◇本田溪花坊氏は富山から通信があつた金澤を經て歸阪の筈。

◇第六支部會員開谷硯水、第六支部會員木村三郎の兩氏は新妻を迎へられた。およろこび申します。

◇椿薫氏は椿薫流と改號。

◇第一部會員阿波泊水氏の家庭に令息一

猫板へ道頓堀の噂なり
鼠取り今日も小川につけてあり
撫でられた子供の髪の黒い事
長い事待たしてお茶で歸す氣か
青年會萬屋ほぎの用をたし

森田輝翠

○

一ト掛の襟にも連れの智慧を借り
優勝旗チト窮屈な型で受け
纏まつた金へは女房口を利き
背なの子が引いても鳴子音をたて
仕合せの悪い蛤街へ出る
言ひ返す力も拔けた非常識
置き替へて見ても下駄箱邪魔になり

吉川啞人

○

菖蒲園二人は新らの下駄を履き
雨上り傘傘傘ミ干してあり
番頭の意見を入れる藏ざらへ
養ゐ切らぬ返事に服屋今日も來る
垢拔けがして來て子守嫌になり

人を加へられた。お芽出度う。

◇第一支部會昌淺沼素人氏は四月に嚴父ミ令息ミを同時に失はれた。お悔みの言葉を知らない。

◇太田徹底郎氏は愛孃が足を痛めたので大變困つてゐる。早く癒るやうに。

◇前號所載徹底郎の『エレヴエーター何やら夢で見た氣持ち』は『何時やら』の誤植、路郎の『麥畑』の句は類句があるので抹消。

◇本號は豫定通り選擧の印刷物やその他いろんな事情のために發行がおくれた。尤も大きな原因は同人の病氣であつた。次號から少しづゝ取りかへしたいと思ふので原稿〆切は一層嚴重にします。

◇本月は本社例會を廢して六厘坊忌を修した。折柄來阪中の金澤の紅法師氏ミ信州上田の呑風氏が來會せられた。句報は次號で發表します。

話しながら愉快に本が見られるのが此店の特長である。主人公藤堂氏は何んな話でも出來る人である。政治も論すれば教育も談じ得る人である。頗る好感を以て人を迎へるから道頓堀邊を御散歩の節は是非立寄つてあげて下さい。商賣にかけては全く掛引のない人です

（路耶生）

古本

高價に申し受けます

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二番

キリンビールの一杯は

人生を愉快にいたします

晩酌に宴會に御受飲を!!

東區平野町四丁目

明治屋大阪支店

早幕にビールをついだ好い娘　一秋坊

立飲みの荷物ビールに重た過ぎ　零骨

拍手の方へキリンビールの栓が飛び　同

乾杯の主はカップに取りまかれ　同

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書『川柳雜誌原稿』と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

七月號課題

五月廿九日締切

（各題二十句以内）

▲橋詰　篠原春雨選

▲年增　近藤飴ン坊選

▲奉公　柳川洲馬　亀井花童子　共選

八月號課題

六月二十五日締切

（各題二十句以内）

▲家出　森東魚選

▲麥酒　本田溪花坊選

▲港　吉川啞人　竹田芦穢　共選

毎號募集

▲近作柳樽（句數無制限）麻生路郎選

▲各地柳壇（會報）編輯局選

▲文章（評論研究吟行漫文）

定價

一部　參拾錢（郵税共）

六部　壹圓六拾錢

十二部　參圓

廣告料

特等一頁　參圓

普通一頁　貳拾圓

同半頁　壹拾圓

五號一行　貳圓

▼御送金は振替口座大阪三一五一四番へお拂込みになるのが一番確實であります▼諸代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てます其の場合には御不在中でも頂けるやうに願ひます但集金郵便には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は寄新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十三年四月十日印刷

大正十三年四月十五日發行

第一卷第三號

（毎月一回十五日發行）

編輯兼發行印刷人　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地　麻生幸二郎

印刷所　大阪市東區農人町二丁目七番地　藤本兄弟社

發行所　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地　川柳雜誌社

振替口座大阪三一五一四番

賣捌書店

（大阪）明文堂　エミヤ波屋　百足屋　田村　公立社

（東京）東條（京都）三宅（神戸）米田

（金澤）宇都宮（函館）石塚

川柳雜誌社同人（いろは順）

主幹　麻生路郎

岩崎柳路　石井風人
橋本二柳子　西垣松雨
龜井花童子　吉川啞人
太田一聲　太田徹底郎
高橋かほる　高橋古城山
竹田蘆穂　武田彩霞
宗清夜調　黑田佳扇
黑木莢豆　柳川洲馬
小泉飛水　酒井零骨
宮内一洲　森田輝翠
關本雅幽

支部所在地

第一支部　大阪市西區八條通南小路
幹事　橋本二柳子
第二支部　大阪市外天下茶屋南下ノ森三五〇
幹事　森田輝翠
第三支部　大阪市外濱寺町羽衣二六一
幹事　酒井零骨
第四支部　大阪市西區鶴町四丁目十三號地嵐山方
幹事　關本雅幽
第五支部　大阪市北區西野田茶園町七九四
幹事　小泉飛水
第六支部　大阪市北區澤上江町二九八
幹事　石井風人
第七支部　大阪市外南濱一八二
幹事　西垣松雨
第八支部　神戸市旭通二丁目八三
幹事　宮内一洲
第九支部　山口縣山口町石原小路
幹事　柳川洲馬
第十支部　神戸市中山手通二丁目九四
幹事　武田彩霞
第十一支部　東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内
幹事　岩崎柳路
第十二支部　函館市青柳町五〇
幹事　龜井花童子

本社幹事　蘆穂（編輯）啞人、古城山（宣傳）二柳子（會計）一聲（廣告）莢豆（寫眞）

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
大正十三年五月十日印刷　大正十三年五月十五日發行

羽車ソース卓上にあるあ睦じさ

定價三拾錢